

その裏には本学会の関係者が興味を持ちそうな技術が数多く使われていた。いたるところで大画面ディスプレイがあり、字の形をした LED ディスプレイや、高輝度のディスプレイなどがあった。特に、フリーモント通りのアーケードは、1200 万個の LED を使い、アーケード全体に動画や CM が流れるというもので、通り自体が一種の VR 空間になっており、非常に興味を惹かれた。また、ベラッジオホテルの前における、音楽にあわせて噴水が形を成す大規模な演出や、ミラージュホテルの前における、火や煙、噴水を利用した火山の演出など、ラスベガスの街を歩くだけでも、応用事例として勉強になるものであった。

今回の HCI International 2007 は中国・北京で開催される。なお、この会議に関する情報は以下のホームページに掲載されている。

関連サイト：<http://www.hci-international.org/>

SIGGRAPH 2005

橋本 渉

大阪工業大学

第 32 回コンピュータグラフィックスとインタラクティブ技術に関する国際会議がロサンゼルス・コンベンションセンターで開催された。この分野では世界最大級の会議で、今年度はおよそ 2 万 9 千人の専門家が集まったとされている。この国際会議に参加する機会を得たので報告する。

今年の基調講演の目玉は、StarWars シリーズで有名なジョージルーカス氏である。録画・録音禁止で、入場も厳重なものだが、立ち見ができるほどの盛況であった。前半の 1 時間は各 Award の授賞式である。東京大学の西田先生が The Steven A. Coons Award を受賞し、熱弁をふるわれた。この賞は CG 界でのノーベル賞に匹敵し、アジア地域から初の輩出だそうである。後半のルーカス氏の講演は対談形式である。ルーカス氏が“Father of Digital Cinema”として紹介されたのに対し、自分は“Storyteller”であり、CG 表現技術はそれを実現する手段である、と強調していたのが特に印象的であった。基調講演に関連して、ロビーには X-wing の模型が飾られていた。実際に撮影に使われたものではなく記念に作られたものである。別のロビーには、現在火星で稼働している地表探査機のレプリカも展示されていた。

専門家があるテーマに沿って講義するのがコースである。今年度は全部で 39 コースが設けられていた。最も著者の関心を引いたコースは、“Spatial Augmented Reality”である。プロジェクタ映像と実世界との融合を扱ったもので、MERL の Raskar 博士と Bauhaus 大学の Bimber 博士によって編成されている。博士らはコース名と同じ題名の本を出版したばかりで、企業展示のブースでも販売されていた。販売員の話によると、サイン会を開催していたらしい。本の内容もコースに準じたものとなっている。興味がある人は参照されたい (ISBN: 1-56881-230-2)。

パネルは、様々な立場の専門家がお互いの意見を述べ、建設的な議論をする場である。パネルの一つでは、映像技術者を育成する大学側と、それを受け入れる映像プロダクション側のディスカッションが行われていた。内容を完全に把握できなかったのは残念だが、大学で教えたことと、学校の実習で作成した優秀なアニメ作品を市場に出すなど、ギャップを埋める様々な取り組みがあることが紹介されていた。

来年度はボストンでの開催が予定されている。ハーバード大学や MIT などの学術機関が集まるエリアであり、楽しみである。

<http://www.siggraph.org/s2006/>



基調講演終了後のホール



ロビーに展示されていた X-wing の模型